海外出張報告書（教員）　　２４年３月２９日提出

氏名	葉原芳昭
所属	大学院獣医学研究科・生理学教室
職	教授
出張先	キングスカレッジ・ロンドン、トリング自然史博物館（英国）
出張期間	2012/03/16-2012/03/22
目的	キングスカレッジ･ロンドンの大学院教育システムの視察およびトリング自然史博物館における研究実施の可能性に関する調査

活動内容

キングスカレッジ・ロンドンは９校のカレッジ（学部）の集合体からなる世界トップ 25 大学のうちのひとつである。ロンドンの中心部に５つのキャンパスを持ち、教員はその間を移動して教育に携わる。学生総数は約 25,000 名でうち 5,000 名が大学院生である。今回は、当該校の大学院システムを調査し、我が校の大学院教育に資することを目的として、事前接触による下記教授の快諾を得て実施した。また、将来的に出張者の研究拠点のひとつとなる可能性のあるトリング自然史博物館（ロンドン自然史博物館の分館的存在）を訪問し、世界有数の標本数を誇る鳥類標本の研究利用の可能性について調査した。

Ⅰ．King's College London における調査

標記期間中に King's College London, Waterloo Campus の生物医科学院・心臓血管部門の Giovanni E. Mann 教授の研究室を訪ね、当該校における大学院(修士、博士課程)制度について情報収集した。北大大学院・獣医学研究科との比較で浮かび上がってきた相違点ならびに参考となる点について以下にまとめる。

１．大学院にコース制度はなく、学位は一律 Ph.D. である。
２．大学院への入学(登録)は筆記試験によるものではなく、面接による。但し、入学資格として学部の成績が$^{+}$A 以上でなければならない。
３．授業料は 4,000 ポンド/年であるが、学生は就職後一定の収入が得られてから返済するのが通常である。生活費相当額（20,000～25,000 ポンド/年）の奨学金が学生本人に、研究費相当（2,000～10,000 ポンド/学生/年）が得られる。従って大学院生１人当たり合計 22,000 ポンドが学生と研究室に入る。
４．留学生の割合はおよそ 25%であり、大学の収入の相当割合を占める。入学可否は Skype によるインタビューで決定される。評価対象となる主要点は英語力であり、語学力が不

足する場合入学は認められない。

５．大学院生を受け入れ、研究を開始する際に、指導教員（３名）と学生との間で A4 サイズ４枚からなる正式な同意書を作成し署名する（図１、１頁のみ：個人情報部分は塗り潰してある）。

６．入学後、まず 9 ヶ月目にそれまでの研究成果と経過、および今後の研究計画と見通しについて A4 サイズ 8 頁からなるレポートの提出が指導教員２名の署名付きで義務付けられており、内容は評価委員会で査定される。査定結果は学生と指導教員の両者にとって極めて重要で、結果次第で生活費と研究費相当の給付が減額あるいは停止となる場合がある。

７．上記の査定は修士課程在学中に 3 度ある。

８．修士課程は２年間の研究活動期間とそれに引き続く続く 1 年間の論文作成期間の計 3 年間からなる。

９．博士課程は３年または４年間の研究期間と続く 1 年間の学位論文作成期間からなる。

１０．大学院生と指導教員間のトラブルについては、アドバイザリーボードが２段階で設置されており、Mann 教授は２段階目の責任者であり、学生本人あるいは指導教員に対して適宜適切な提案を行って問題解決に務めることとなっている。比較的頻繁に相談がある。

１１．学位の審査委員会に指導教員は参加できないが、適宜接触を受けることは可能である。

１２．学位を取得する利点は現状さほどない。経済的不況が影響。

１３．スクーリング(講義・演習)もあり、単位の取得が義務付けられている。しかし、その割合はさほど多くはない。

１４．教員としての授業は、Mann 教授の場合年間数時間で、他の学部・学科の授業も担当しているが多くの時間を研究に充てることができる。

１５．一方で研究活動の評価は厳しく、１０年間で１編当り(合計ではない！)インパクトファクター10 以上の雑誌に４編以上掲載されることが義務づけられており、達成できない場合には研究室運営経費や研究室の強制的削減が課される。

１６．定年制はなく、望めば生涯活動を続けることができる。

１７．大学院生は指導教員の指導のもと、海外を含む他の研究室で研究を進めることもできる制度となっているが、そのケースは少ない。

１８．研究費獲得が多く、政治的に力のある人物が組織を思いのままに動かすことになり、新規職員の採用も、従って、そういう人物の領域または意にかなった者に片寄ることになる弊害がある。

以上、北大・獣医学研究科とは異なる専門大学院であるため、一概に単純比較するには注意が必要であるが、注目すべき点として特に上記の 2、5、6、7、10、15 が印象に残った。当研究科の場合は、入学試験と面接試験により合否が決定されるが形骸化している部分が認められ、特に留学生の質を向上させるためには改善が求められよう。研究経過の報告・討論は本研究科でも実施しているところであるが、その厳しさについては極めて大きな差が認められる。学生と教員間のトラブルについてはアカデミックハラスメント防止対策を構築させつつある我が国とは別の意味で深刻さが垣間見られた。最後に大学院制度とは直接関係しない点ではあるが、教員の質の維持も視野においた IF 10 以上の雑誌に論文掲載という条件は、英語国民であるという利点を考慮しても極めて達成が難しいことであるという印象を受けた。

Ⅱ．トリング自然史博物館における調査

現在、動物の感覚生理特に嗅覚と視覚に関連した研究を進めているため当該施設を訪れた。

１．将来の連携研究のカウンターパートまたは利用施設となる可能性のある標記トリング自然史博物館を訪問し、連携研究の可能性について、分館の責任者である Paul Kitching 氏に問い合わせた（図３）。当該博物館はロンドンの自然史博物館の分館という位置付けであり、ロスチャイルド家が世界各地から収集した各種動物の剥製標本を展示保管している。とりわけ、鳥類標本の保存数は世界最大規模であり研究目的での利用も受け入れている。

２．National Rail トリング駅からのアクセスは多少不便であり、研究を支障なく進めるためにはトリングを拠点にするのが適切と思えた。

３．鳥類標本数は確かに多数展示されていたが、保管数と種類については今回の訪問では確かめることができなかった。

４．研究目的での利用についてはまず責任者にメールでコンタクトし研究概要を説明する必要がある。

５．トリング分館での研究が不可避的に必要な場合に限って利用するというのが現実的であるという結論に至った。